



I N D E X

- 私サイズの園芸療法.....1
- 設計ノート.....3~4
- 第19回エクステリア施工コンテスト  
入賞作品発表.....5~8
- エクステリアアンケート.....8
- 2002年エクステリア  
商品展示会報告.....9~10
- 御庭会通信.....裏表紙
- 御庭会スタッフ紹介.....裏表紙

表紙:村西恵津氏/イラストレーター・デザイナー  
インテリア・生活小物デザイン等幅広く制作活動...2000年九州・沖縄サミットでは、公式贈答品となった扇子の挿し絵を手がける。

私サイズの園芸療法

グロッセ世津子氏

医療施設と園芸療法 Part2

—癒しの環境となるために—

医療施設が癒しの環境になるために、いくつかのタイプの提案をしてみたいと思います。まず、ヒーリングガーデン、癒しの庭です。「五感を通して癒される空間」と言ったらいいのでしょうか。患者さんはもちろんのこと、家族、見舞客、施設のスタッフ、地域に住む人などみんなが利用できて、くつろげる場所、懇談できる場所、自然を感じられる場所、一人になれる場所、催しごとができる場所としての庭です。もちろん主役は植物ですが、水やアートの要素も取り入れます。水もデザイン次第で多様な動きと音を演出でき、リフレッシュ効果、鎮静効果、浄化作用などを得ることができます。体の不自由な方や車椅子の方のために通路が滑らない、照り返しが強くない、段差がない、手すりを設けるなどの配慮も必要です。要所要所に大きな木やパーゴラで日よけできる場所があって、水の音を聞きながら、花を愛でながら、お茶を飲みながらのんびりできたり、おしゃべりできます。花壇も床上げして高くしてあげれば、車椅子や立ち姿勢からでも植物に触れたり、匂いを嗅いだり、繊細な植物の世界を身近に探求できます。



ヒーリングガーデンに欠かせない水の要素。生命の源でもある水の流れや音や涼感は私たちが癒してくれる。(岩手県東和町の園芸療法ガーデン)



日よけとして庭に欠かせないパーゴラの下は、花の香りと緑の屋根に守られてくつろげる場所になる。(岩手県東和町の園芸療法ガーデン)

集団生活の中で、一方的に看護を受ける、見られるという受け身の立場にずっと身を置いていると、ひとりきりになりたいとき、親しい人と親密に話したいときもあるでしょう。そんなとき、庭の一角に、生け垣やフェンスでちょっと人目を避けられるような工夫がされているプライベートな空間があればいいなあと思います。そして、誕生日などのお祝いごとや、ミニコンサートなどのイベントや、お花見のような季節の行事などグループで利用できるスペースもあるといいですね。そこなら飼い犬や飼い猫も来られて、アニマルセラピーもできます。そこは、外の人や外の生活と病院との接点でもあります。ともすれば無味乾燥で生活感のない環境で、人間関係や生活から阻害されて療養するより、特に長期間滞在しなければならぬ患者さんが、病気であってもできるだけ「普通に」生活できる場、いろいろな人といろいろな関係を相互的に結ぶ場を持つことは、生きる意欲や病気とつきあっていく力を得ることにつながり、立派な治療になると思います。「五感を通して癒される空間」の立役者はやはり植物です。植栽のデザインを考えるに当たっての植物の選



植床を利用する人の高さに合わせて高くしてあげただけで、立ち姿勢や車椅子からでも植物に触れることができる。(川口市の福祉センターの屋上庭園)

択のポイントをいくつか挙げてみます。

- ・ 各季節を特徴づけるもの
- ・ 思い出につながるもの
- ・ 患者さんの希望を反映するもの
- ・ 花や葉や枝の色、形、大きさ、動きなどで観る要素、香りなど鼻で観る要素、触感など肌で観る要素、風に揺れる葉音、花に群がる昆虫羽音、鳥の鳴き声など耳で観る要素、味など口で観る要素を持つもの
- ・ 毒性やとげのないもの(少なくとも人が直接触れるような場所には植えない)

このような要素を豊富に、そしてバランスよくデザインするために、日本の公共空間に見られがちな樹木や低木、しかも常緑中心の植栽に偏らず、もっと実のなる木、花木、宿根草、食べられる植物、一年草、球根なども使うといいですね。



お見舞いに来た子供たちも水やりを手伝ってくれる。



病院の中のチルドレンズガーデン

次に小児病棟のある病院にぜひ提案したいのが、チルドレンズガーデン、子どもの庭です。入院している子供たちが遊べて、植物を育てられる庭です。そこは、自分たちの兄弟と「一緒に」楽しめる場所でもあります。病人ではなく普通の子供のように...。植物を育て、収穫し、利用するというプロセスは、学習の機会に満ちています。どんな道具が欲しいか、どんな植物を育てたいかなど、子供たちの目線を大切に、子供たちの意見に耳を傾け、できる範囲で子供たちと一緒に考え、作っていきます。病気にもかかわらず本来「創造的な存在」である子供たちの感性と体と頭が動き、その子なりのやり方とペースで作ることに関わっていくことのできる空間を保証するという事は、子供たちのその子なりのいのちの進む道筋を保証することでもあります。



他の命を育むという創造的行為は、子供たちに責任感、達成感、有用感、希望を与えてくれる。

\*: アメリカ、ポートランド、レガシーヘルスシステム  
写真提供 テレシア・ハーゼン

グロッセ世津子氏  
園芸療法研究者  
(有)みどりのゆび取締役企画部長  
立教大学文学部仏文科卒 仏ブザンソン大学留学  
景観設計士グロッセ・リュック氏のパートナーを務めながら、欧米の緑化・園芸・造園などの情報収集と伝達を主業務とし、園芸療法の普及をめざして全国で講演しておられます。「ガーデンデザイン」「園芸療法」世界の庭園」他多くの著書があります。